備陽史探訪

武島氏追悼特集

第46号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

一〇周年記念特集
年頭にあたって

会長　神谷　和孝

新年あけましておめでとう
御座居ます

新らしい年を迎え会員の皆様、如何お過ごしでしょうか。お一人、お一人が今年の抱負を抱かれて新らしい年を出発なさったことと思います。

さて「備陽史探訪の会」にとっても、非常に意義のある、かつ大切な年を迎えた感がいたします。

前々から、機会あるごとに会員の皆様には直接に口頭で、あるいは会報等で文書を通じて、平成二年は「備陽史探訪の会」にとっては設立十周年を迎えることになり、それを記念して二月十一日(日)ー建国記念日)に、全国的に注目を浴びている吉野ケ里遺跡の発掘調査の責任者である高島忠平先生を講師に迎えての講演会及びニューキャッスルホテルに於ける祝賀の宴を催おす計画を進めていることをお伝えして参りました。

昨年の半ば以来、計画を実現すべく、幾度となく役員会を開き、細かい内容にわたって計画を積みあげていき、年があけた現在は二月十一日の記念行事は必らず立派な、会員の皆様に喜こんでいただけるものになると自信を持てるまでにいたりました。

計画をすすめていく中で最も嬉れしかった事は、昨年の十一月に開館したばかりの広島県立歴史博物館の御理解をいただけて記念講演会の共催と同館の講堂の使用を承諾していただけたことでした。広島県立歴史博物館にとっては開館したばかりであり、県立と言う公の立場から、我々の共催と会場使用の申請を、そんなに軽々しくは承諾された訳でないと推察しています。同館と地元の民間団体との今後のあり方について色々と思考されたに違いありません。

承諾された理由の中には、我々「備陽史探訪の会」の今までの活動内容、会のあり方などこの十年間の積みあげたものを考慮にいれていただけたものと思っています。

そのように考えると、今まで苦楽を共にしながらの会員の皆様方の協力、役員の方々の献身的な努力が実ったものと嬉れしく感じる次第です。

一口に十年間と言っても「備陽史探訪の会」の十年間の軌跡をふりかえってみると、決して順風満帆の状態で現在にいたった訳ではありません。一番逆風が吹いたのは会の創立以来常に発展を望み協力しあった仲間同志で、会の会員数がふえるに従がって会のあり方をめぐって対立が生じた事でした。

昭和五十六年四月僅かの人数で出発した当会でしたが、歴史に関心を抱かれている市民の方々が次々に入会され、マスコミ等にも会の活動等が紹介されるようになって、会の中心的な役割を担った者にとって、ホッと一息ついた頃、悪く言えば会の活動にマンネリが生じた頃でもあったのですが、そのあり方に不信感を持たれた方が会のあり方に一石を投じる気持で、色々の問題提起を行こなわれ　その整理がなかなかキチンと出来ないまま活動を続ける状態が続き表面に出ないままにもギクシャクとした空気が役員の中に潜在していました。討論を重ねる中でどうにか整理が出来、以後会も発展して会員数を百五十名を数える、県下有数の歴史団体に成長して来ましたが、今考えると、会のあり方に一石を投じられた方々も本気で会の発展を願ってのことであり、その問題提起について本気で役員の方々が討論を重ねて来たからこそ、今日の「備陽史探訪の会」があるのではないかと思わずにはいられません。

発足当初、元気で行動を共にされた方の中でも、年には勝てず退会された方とか、病気になられた方もあって寂びしく感じられる一方で、中学生の時に入会し、今年は大学に入学し歴史の勉強を続けると言う会の活動の中で育って呉れた会員もいて嬉れしく感じられます。

どうぞ二月十一日の記念行事は皆様方の協力で是非成功させ、それを契機に会が更に躍進することを願ってやみません。一人でも多くの方の行事への参加をお願いして筆を置きます。

備陽史探訪の会 十年の歩み（その一）

副会長　田口　義之

昭和五五年（一九八〇）

九月七日　神谷宅に於て、福山ユースドマップクラブの総会を開き、新歴史研究サークルの結成方針を決める。

一〇月二六日　第一回史跡見学会を鞆に催す。

一一月二四日　第二回史跡見学会、芦田町の有地氏の史跡を訪ねる。

一二月二一日　昭和五五年度納会を関戸和典氏宅に於て行う。

昭和五六年（一九八一）

三月二二日　第三回史跡見学会を蛇円山に催す。

四月二六日　備陽史探訪の会発足、会長　神谷和孝。

六月二八日　第四回史跡見学会、岡山県備前市を訪ねる。

一〇月二五日　第五回史跡見学会、蔵王山周辺の遺跡を訪ねる。

一一月二三日　第六回史跡見学会、郡山城、三次風土記の丘を訪ねる。

一二月一九日　昭和五六年度納会、於神谷会長宅。

昭和五七年（一九八二）

一月三一日　道後山スキーツァーを催す。

二月一四日　二月例会（史跡見学会を改称）木之上城址踏査（七森、井川担当）

三月二一日　三月例会「沼隈半島のチベット横倉谷を探る」（神谷担当）参加九名。

六月一三日　六月例会、竹原市の史跡めぐり（河村担当）参加八名。

七月一一日　七月例会、吉備路を歩く（種本担当）参加六名。

九月一二日・九月例会「神辺再発見」（田口担当）参加九名。

一〇月一七日　一〇月例会、吉備路パート2（河村担当）参加七名。

一一月一三・一四日　一泊旅行、奈良県吉野の旅（参加一六名）

一一月二七日　第一回歴史談話会「戦国時代の備後国」田口義之「国衆について」藤井高一郎

一二月一一日　第二回歴史談話会「瀬戸内の古代山城」七森義人「神辺町の埋蔵文化財とその活用」菅波哲郎

一二月一一日　一二月例会「神辺町迫山古墳群の分布調査」（田口担当）参加一二名。

昭和五八年（一九八三）

一月一六日　第三回歴史談話会「歴史と伝説」平井隆夫、参加二五名

一月二三日　一月例会「岡山県総社市鬼の城踏査」（七森担当）参加一一名

二月一三日　第四回歴史談話会「備南国人衆の動向」藤井高一郎、「古代山城」棗田英夫、参加三四名

二月二〇日　二月例会、府中市常城の踏査（棗田担当）参加一二名

三月六日　第五回歴史談話会「吉備の中の備南」佐藤一夫、参加二七名

三月二一日　三月例会、尾道古寺めぐり（種本担当）参加三七名

四月三日　四月例会（バス）神石町の史跡を訪ねて（武島担当）参加三八名

四月二四日　第六回歴史談話会「福山城の建築」松本房治、参加三七名

五月五日　第一回親と子の古墳めぐり（駅家方面）参加一二六名

六月一二日　第七回歴史談話会「幕末維新の福山藩」森本繁、参加参加二八名、終了後総会

六月二六日　六月例会（バス）「本郷町の史跡めぐり」（山口担当）参加四七名

七月一〇日　第八回歴史談話会「宮座について」山上久夫

七月二四日　七月例会（バス）「矢掛本陣と吉備郡真備町」（阿部担当）参加五〇名

八月二一日　第九回歴史談話会「備後地方の西大寺律宗」堤勝義

九月一一日　第一〇回歴史談話会「芸備地方に於る近世村落」青野春水

九月一八日　竹原史跡めぐり（バス）（末森担当）参加五〇名

一〇月一〇・一一日　出雲路一泊旅行（バス）参加二七名

一〇月二三日　第一一回歴史談話会「宮氏について」田口義之

一一月三日　瀬戸内村上水軍遺跡めぐり（フェリーチャーター）講師　森本繁、参加一九〇名

一一月二〇日　第一二回歴史談話会「さいはてのシルクロード」森下芳文

一二月四日　第一三回歴史談話会「阿部正弘とその時代」鐘尾光世

一二月一一日　一二月例会（バス）吉備路風土記の丘古墳めぐり（古墳部会担当）参加五〇名

一二月一八日　忘年会

昭和五九年（一九八四）
一月二二日　一月例会　蛇円山に登る（高橋担当）参加一四名
一月二九日　第一四回歴史談話会「県北の中世山城跡の研究の現状」新祖隆太郎　参加二二名
二月一一日　総会及び第一五回歴史談話会　参加二二名「備後中世武士団」田口義之
二月二六日　二月例会、新市の山城めぐり（七森担当）参加二〇名
三月一一日　第一六回歴史談話会「古代山城」七森義人　参加二一名
三月二五日　三月例会（バス）甲山町の史跡めぐり（田口担当）参加五六名
四月八日　第一七回歴史談話会「神辺町迫山古墳の発掘調査」佐藤昭嗣
四月二二日　四月例会（バス）神石郡三和町の史跡めぐり（立石雪夫担当）参加五八名
五月五日　第二回親と子の古墳めぐり（赤坂町方面）参加二〇二名
五月一三日　第一八回歴史談話会「備後有地氏について」田口義之　参加二六名
六月一〇日　第一九回歴史談話会「近世備後の村落」青野春水　参加三三名
六月二四日　六月例会（バス）帝釈の史跡めぐり（武島担当）参加五四名
七月八日　第二一回歴史談話会「大和国家の関東分国について」安井利雄　参加三二名
七月二二日　七月例会（バス）備前焼探訪（神谷担当）参加三一名
八月二六日　第二一回歴史談話会「志川滝山合戦について」田口義之　参加三一名
九月一六日　第二二回歴史談話会「吉田松陰」棗田英夫　参加二六名
九月二二・二三日　萩一泊旅行　参加二三名
一〇月一四日　一〇月例会　鞆の浦史跡めぐり（森担当）参加五四名
一〇月七日　第二三回歴史談話会　映画「新平家物語」上映　ムービーコネクション共催
一一月三日　第二回船めぐり～笠岡諸島～（フェリーチャーター）講師　森本繁　参加一四三名
一一月二〇日　第二四回歴史談話会「遠藤弁蔵」平井隆夫　参加二九名
一二月二日　天明一揆の跡を探る（共催）
一二月一四日　第二五回歴史談話会「赤穂浪士を探る」（吉田、種本、七森担当）参加一〇名　忘年会　於松之家
昭和六〇年（一九八五）
二月一七日　総会及び歴史講演会「夢幻自戒」村上正名　参加四〇名
二月二四日　二月例会、蔵王山周辺の史跡を探る（阿部、神谷、後藤吉田担当）参加五一名
三月三一日　三月例会、北山の歴史と民俗を探る（田口、佐藤、石井、七森担当）参加八六名
四月一四日　第二六回歴史講演会（談話会を改称）「風羅堂について」神谷和孝　参加一四名
五月五日　第三回親と子の古墳めぐり（神辺、加茂方面）参加六九名
六月九日　第二七回歴史講演会「九、一〇Cの海賊について」下津間康夫　参加二三名
六月一六日　六月例会、忠海の史跡を訪ねて（末森担当）参加四三名
七月一四日　七月例会、松永湾岸の歴史を訪ねて（パート1　金江町かいわい）（種本、棗田、七森担当）参加三一名
八月一一日　第二八回歴史講演会「千原古墳について」篠原芳秀　参加二一名
九月二二・二三日　一泊旅行、初秋の飛鳥を訪ねて　参加四〇名
一〇月六日　第二九回歴史講演会「渡辺氏について」田口義之　参加二五名
一〇月二八日　一〇月例会（バス）横倉の平家谷を訪ねて（森、神原、中西担当）参加五二名
一一月二四日　一一月例会（バス）備北の宮氏を訪ねて（武島担当）参加四六名
一二月二二日　第三〇回歴史講演会「日本仏教の歴史」堤勝義　参加一五名

内海　伴江

田中作その幼子のまろき手よロダンの手になきぬきみにて
（井原方面探訪の折りに）
紫草生いたりしはどのあたり船岡山に万葉偲ぶ
暮せまる安土城跡筆太く下馬と彫られし石碑の立つ
（びわ湖南方面の折）
はばむもの幾つを越えて来しものを尚越えきれぬ岩海にあう
（上下方面矢野の岩海）

「十年前は？」

七森　義人

此様な題で文をと云われたがパッとしたものが浮んでこない為に、例会の「鬼ノ城」について書いてみる事にして「最初の例会」

最初の例会

休みの日は早起きという性格の自分に合せて駅に七・三〇集合という強行を行ない、七・四〇ごろの国鉄にて倉敷乗り換え総社へ、駅からタクシーにて約七Kmぐらい離れた山中へ行き、鬼ノ城入口へ着く、最初に第三城門へ行き、第一水門の方へ向って、石垣の上を歩きながら、眼下の総社平野を見下す、石垣の高さ、石仏を見ながら歩き、第一水門にて水門の穴を覗いたり、後の池跡へ行ったりする。第三水門を過ぎ第四水門へ向うが、此で道が石垣上から離れ　石垣上は急である為に第四水門へ行く者と、道を進む者の二手に分かれる、水門へ行った者は更に進み、阿弥陀ケ原から登って来る道と合流する所にて第一城門を見て、その道を登り、道を進んだ者と合流し、少し広い広場の所にて昼食を摂る。此から第五城門のあたりが見えて、写真等で出て来る場所をながめる。第五水門を通り、石垣の突端へ行く。此から帰路に着く。右側に石垣、左側に池を見ながら歩き、第三池跡を通り、展望台へ着き、総社、福山へと帰路に着いた。

私見として、此の山城を見る事によって、中世、近世との城の違いを石垣、郭、広さ等がわかってもらえればよかったが、山岳寺院が後に出来た等、国府との関係、等々の意見も出て来た、更にその次の二月にはなんと棗田氏によって常城へ行ったが、城跡がもう確定されている城とまだ不確定の二種の城を続けて見られた、この古代山城は備後に、二城有るとされており、続日本紀に、備後国、安那郡茨城、芦田郡常城を停むと出ているが、此二城がどこにあるのか……？

新刊案内

『芸備系図史料集』
山本清人編著
広島県の中世武将の系図と出自の資料集
送料共（二千七百円）
発行 ☎015 秋田県本荘市出戸町西梵天一四八－三　家系研究協議会

時宗と草戸千軒・吉備津神社

堤　勝義

一、はじめに

時宗（じしゅう）、今日ではあまり聞きなれない名前だと思いますが、中世の時代には一大勢力を誇った宗教宗団です。

時宗の開祖は、一所不在（いっしょふざい）をモットーとした一遍で、個々の信仰者達を時衆と称しました。鎌倉時代に出現した宗教の中ではもっともおそく創唱された宗教集団です。

ここでは、一遍の出自から教義について簡単に書き、草戸千軒、吉備津神社についても書いてみたい。

二、時宗とは

一遍坊智真は一三三九年（延応元年）に伊予国で生まれた。父は河野通信の子通広で、承久の変の時に朝廷側についた為に、祖父の通信は、奥州江刺に流され、父の兄弟通政は斬首、通末は信濃国伴野荘に配流された。

父の通広のみは出家して如仏と号して、道後宝厳寺の寺内に隠棲していた。

十歳のときに母を失い、出家して随縁と称した。建長二年（一二五〇）に、大宰府の聖達を訪れ、浄土宗の証空が開祖となった西山義（せいざんぎ）を学ぶことになった。

浄土宗の間祖法然の弟子は親鸞を初めとして多くの門弟がいたが、浄土宗を受けつぎ、教義を変えながら発展したのが、証空の西山派と聖光坊弁長の鎮西派であった。

京都の智恩院は最初は西山派であったが、現在は鎮西派の総本山である。

西山派の教義は、心を一つにして修する善でも、迷いの心そのままで修する善であっても、阿弥陀仏の名を称えれば、救われると説くのに対して、鎮西派は念仏を多くとなえるのみでなく法然の否定した行（ぎょう）をも重視し、それによって救われると説いた。後の一遍の教義をみると、西山派の考えが大きく一遍に影響を与えていることがわかる。

弘長三年（一二六三）父如仏の死を機会として、伊予国に帰国して、文永八年（一二七一）に善光寺に参詣する間は、彼の消息は明らかでない。

その後、再び出家したと思われる一遍は、熊野へ参籠の途中で、五人

の道者とひとりの僧にゆきあい、そこで、「南無阿弥陀仏」決定往生六十万人　のふだをわたそうとしたが僧は「弥陀を信ずる心もおこらなければ、念仏をとなえられない。」といって、受取ることを拒否した。それを信がなくても、念仏をとなえなくてもよいからといって無理矢理にふだを渡した。

しかしながら、信のない念仏をとなえない僧に札を与えた事を反省し、熊野本宮の証誠殿に参籠して、権現の啓示を仰ぎたいと願った。その願いがかなったのか、白装束に長頭巾をかぶった山伏すがたの熊野権現があらわれて、「融通念仏すすむる聖、いかに念仏をばあしくすすめらるるぞ、御房のすすめによりて一切衆生はじめて往生すべきにあらず、阿弥陀仏の十劫正覚に、一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と必定するところなり。信・不信をえらばず、その札をくばるべし。」と教示した。

その意味するところは、「融通念仏をすすめておられる聖よ、念仏をどうして間違えてすすめているのか。御房のすすめたことによって、一切衆生がはじめて往生すると思っているのは間違いだ。衆生が弥陀の浄土に往生できることは、すでに阿弥陀が法蔵菩薩といった十劫の昔、誓ったものであって、今にはじまったことではない。したがって信じたとか信心の心がないということもなければ、良と賤、僧と俗、男と女を区別することもなく、縁ある人たちには誰彼の差別なく、その札をくばりなさい。自らのはからいにより阿弥陀仏を信じさせて、念仏をさせ　その上で往生を約束するがごときは、思いあがりもはなはだしい。すでに阿弥陀によって往生は保証されているのだ。」

すなわち、一遍は、法然や親鸞、日蓮等よりも一段と易（い）を追求して簡略化していったのである。

三、草戸千軒の時衆

備後地方の時宗をみてみると、鞆には本願寺（現存）があり、尾道には常称寺や西郷寺を初めとして多くの時宗寺院が今もある。

草戸千軒にも時衆がいたのではないかと、想像していたのであるが、昭和四十四年十一月に発行された『時衆過去帳』（現神奈川県藤沢市の総本山清浄光寺）を手に入れることが出来、それをみていると、建武年間の所に裏書として、「備後草津」とあり表書には唯阿弥陀仏とみてとることが出来る。備後草津とは何処であろうかという事には多くの意見があるかとも思われるが、当時、備後で草津と名乗っていたのは、草井津等草戸千軒の名からみて、草戸千軒に間違いなかろうと思う。もうひとつは、永享十一年から永享十二年にかけて書かれた過去帳の裏書に「草出」とあり、これは地名がない。それゆえ、これは何処であるのかは、わからないのであるが、草出の下に「尾道岸寮」とあり、全国的なものであるか、『太平記』等の記述からみても、私は「草出」とは草戸千軒のことであろうと確信している。

このことからみると、草戸千軒で死んだ時衆が二名いたことがわかり、草戸千軒に住み、そこを拠点として活動していた時宗僧がいたことがわかる。

時衆は、福山市駅家町とか新市町でも、その跡を残しているので、鞆の本願寺を拠点として、草戸千軒を中継して、駅家、新市にいったものと考えられる。網野善彦氏によれば、河原は無縁の場であったので、時衆が住んでいたのは当然のことであるとも思われる。

また、草戸千軒近くには常福寺があり、一時西大寺律宗であったが、港町や河原等の無縁所を拠点にして活動していったことを考えれば、この二宗の間には共通点があったことがわかる。

四、吉備津神社の一遍

弘安元年（一二七八）夏伊予に戻り、秋には安芸の厳島を訪れ、冬備前国に入り、福岡の市では吉備津宮の神主の息子を帰依し、「弥阿弥陀仏・相阿弥陀仏をはじめとして、出家をとぐるもの、惣じて二百八十余人」であったという。

弘安九年には、播磨国尼崎・兵庫を経て、印南野の教信寺に詣り、沙弥教信を追慕した。翌年の十月に姫路の書写山に詣で、国中を巡札して松原八幡宮に参詣した。そして備中国軽部、備後国一宮を賦算し、秋のころ厳島に詣でている。

『一遍聖絵』をみてみると、一遍が備後一宮（吉備津神社）を訪れた時のことを画いていて、吉備津神社の当時の様子をかいまみることができる。

非常に広大な伽藍の最奥に一遍一行がすわり、まわりに吉備津宮の供僧や神官等がすわっている。供僧の方がいい位置にすわっているので、神仏混合であっても神官に対する僧の位置が想像される。

一遍達はいったい何をみているの

かというと、「奏皇破陣楽」（現在は廃絶）という奏の始皇帝ゆかりという舞楽をみているのである。

『一遍聖絵』の吉備津神社の伽藍と、現在新市町の資料館に所蔵されているずっと後の伽藍絵図をみくらべてみると、誇張があるとはいえ、前者の広大な伽藍が想像される。

舞楽については、尾道浄土寺の文書にも、吉備津宮の舞楽が出てきて、舞楽が近在に知られていたものと思われる。また、現在吉備津神社の宝物館には、舞楽の面が何点か所蔵されている。

さて、もう一度『一遍聖絵』に目をむけてみると、吉備津宮の門前であるが、白の浄広を着て靴をはいた武士が今まさに供を連れて入ろうとしているのであるが、供の者は裸足（はだし）であるのは注目される。宮本常一氏が書いている所であるが、他の絵図でも武士あるいは供の者が、裸足で書かれているものがあるのでどのようなことか、裸足の者もいたことが想像される。

そして、今まさに武士が入ろうとしている門の左右には随身が立っているので、このころには二名の随身が左右に立っていたことがわかる。

五、時衆の跡

駅家町や新市、府中、世羅等には時衆と関連あるであろうと思われる伝承や遺跡が残っている。

駅家町中島の最明寺（最明というのは北条時頼の出家名で、時宗によって各地に時頼伝説が伝播していった。最明寺と最明の関連については不明）には阿弥号の遺跡がある。新市の日隈城跡にも阿弥号の遺跡がある。

駅家町には、平家の斉藤実盛の遺跡がある。斉藤実盛は金沢の片山津の方で討ち死にしているので、駅家とは直接の関係はない。

斉藤実盛については時宗の遊行上人の前に亡霊となって現われたという伝説があり、時衆とは深いかかわりがあるのである。

また、世羅の青近には曽我兄弟の伝説が残っていたのであるが（今も残っていると思うが）、これも時宗と関係あり、曽我伝説を持って歩いたものと思われる。

昨年武島さんが死去されたとの事、時々、お話をする機会がありましたので、びっくりしました。武島さんの御冥福をお祈り致します。

合掌

相方城探訪記

田中　伸治

十二月の半ばごろ「ヤマダ」と「ナカニシ」とよんでいる友達と相方城にでかけた。

家から相方城までは一時間で行けるだろうと、いつものように自転車をこいでいたのだが、どうやら距離を間違えたらしく麓についたころには三十分オーバー、ついでに運動不足のおまけがついて城のある山を見上げがくぜんとしてしまった。

まあ　それでも気をとりなおして登ってみたらなんと道が行き止まり、しかしもう中腹にさしかかり、ひき返すに返せずそのまま山の中をすすむこととなった。すると案の定視界がひらけ城にたどりついてしまった。このころになると、もう疲れて疲れてしようがなかった。そして城内を回ってみたのだが、まず目につくのは巨大な石垣、まさかこれほどとは思ってもみませんでした。昔の人のすごさに感心させられました。そして頂上でひと休みしながら景色を見ていると対岸に亀寿山城や府中の町が見えました。へぇーながめがいいなーと感心し、それからまぁ写真でもとろうかと「ナカニシ」君「ヤマダ」君と一緒に記念撮影。そのあと残りを見て回り、ただただおどろき。あとは下り道を見つけ、つかれも忘れて帰りました。その次の日に相方城ののっている本を見ると記憶と一致する所がけっこうあってとてもおもしろかったです。やはり史跡をめぐるのは楽しいですね。

追憶

藤代　由子

遠く離れて去った人よ
もう一度見せて聞かせて下さい
私の生きている証しの為に
古い歴史のロマンの夢を
貴方の手の中にある小さな
器の破片を私の手に移して
昔の夢を語って下さい
私の手の中の砂がこぼれ落ち
二度ともとには返らない
それでも私は風のように
やさしく貴方をつゝむでせう

うつせみの
はかなき人世の
流れ雲

故武島種一氏追悼集

武島種一氏に捧ぐ

立石　定夫

武島さんは、多年県農林部に勤務された人に相応しく、実直で真摯な人であった。

特に郷土史に深い理解と強い興味を持ち、諸行事に進んで参加をされ学習を続けられた。その態度には幼児のように素直さとみずみずしい感動性が窺われた。

武島さんとの最後の旅行は、仲秋の九月杉原盛重を訪ねての伯耆行きであった。武島さんは病状を隠し元気に江美城址や米子城址に登られ、景色を愛でながら歴史の往時を懐古されていた。特に富田城址で一行の多くの方が月山に登っていた間、四、五名が尼子国久率いる新宮党の館跡や尼子清定　経久父子の眠る洞光寺を訪れたときも同道して得意の写真を撮られていた。館跡では天文二十三年の国久らが討たれてから三百年遠忌を記念して建つ石柱に、「人間の歴史とは風のように無情ですね」とつぶやいて居られた。その言の葉の悲しみが今となっては私の耳朶から消えない。そのあと多少時間が余っていたので、ふらりと私は広瀬町の郷土資料館に立ち寄ってみた。

すると階上の歴史年譜の前で武島さんが説明文を書き留められていた。それは新宮党の乱後、尼子誠久の末子（国久の孫）孫四郎（後の勝久）が家臣小川重遠に助けられ備後東城の徳分寺に匿われたと云う一節であった。「どうしましたか」と声をかけると　武島さんは「徳分寺とあるのは間違いではないでしょうか」と尋ねられたので、「孫四郎をかくまったのは徳雲寺と承知しています」と私は答えた。武島さんはこのことの真否にこだわり、旅行後に徳雲寺へ聞き合わされたらしく私に来た書状によると徳雲寺は寺名を以前は徳分寺と云ったということであった。お好きであった歴史に寄せる並々ならぬ関心と史実追求をゆるがせにしない熱意にいたく感心したものであった。

旅行から帰りのバスで各自が感想を述べ合ったとき、武島さんはマイクを取られ「この度の旅行が楽しく、杉原盛重の本が近く上梓されることを待っている」と熱っぽく話された。私はその期待に応えねばならない。

武島さんは素直な方であった。人と交わるに飾ることなく淡々と水が流れるような人であった。

武島さん、探訪の会は今後もずっと続くでしょう。どうぞ安らかにお眠り下さい。

芦の穂に狐火を見し寒の雨

ありし日の武島氏（左）1989. 9. 23 米子城址にて

歴史の虫

熊谷　操子

有福城の近くに森貞という地名がある。どういうわけか私の父方の姓も森貞。亡父の弟の三男薫は四十年ほど前に相渡の武島家に養子に行った。只し同じ部落の同姓ではあるが種一氏とは無関係らしい。私の父の兄の長男の妻の妹の娘が種一氏の御子息に嫁いでいるという事を、先日この薫から聞かされた。まるで舌をかみそうな続柄ではあるが、回り回って更に回って武島さんとは親類関係になるではないか。この話をもっと早く聞いていたら、きっと三人の間に面白い話題が飛び出していただろうにと思うと残念でならない。

林業技手に合格し、県職員として尾道、三次の地方事務所を歴任の後五十年には吾妻帝釈休暇村の村長という役職に就かれた由、随分嬉しかっただろうと想像する。五十八年に県職員を退いてからの名刺の肩書には、九つもの歴史の会の名前があったという。「一人で何度も行った淡路島でしたが、今年は金婚式なので家内にも観せてやりたくて連れ立って行って来ました。私は一人で行き

たい所があったので加古川から家内を一人で帰し、帰途、広島県庁へ寄って天皇陛下の御病気平癒祈願の記帳をして来ました」と薫兄に語っていられたそうである。

兵庫県の園通寺の住職が「武島という姓は野見宿禰（垂仁朝に殉死の悪習を埴輪の献言で変え、土師臣を貰った人物）の子孫ですよ」と確かそうな事と言っていたよ。と、とても嬉しそうに薫兄に話したとか。

「先日ね、二上山へ登って来ました。健脚で三　四十分らしいですけれど私達夫婦は三時間以上もかゝりました。熊谷がね、俺はもう死ぬぞ、死ぬぞと威すものですから、主人の荷も背負うて私の胸の×の字は〃とえはたえ〃ですわ。これでいいかという程小休止、大休止ですもの、進む筈がないんですよ」と話すと、武島さんも大笑いしながら「私は二度登りましたよ」「あらっ、それじゃ武島さんも大津皇子のファンですか私、思ってたより小さな廟に思わず胸を締めつけられました。」と言うと「天皇になっても決しておかしくない立派な人物だったと私達は思うけど、当時としては反逆児の名の許に抹殺されたのですから止むを得ないのでしょうね、あれで」二人の話が〃壬申の乱〃に逆戻りしかけた時、福山から会員を満載した井笠の大型が二人を拾いに寄ってくれた。五月二十一日午前九時半だった。

九月二十三日、山陰一泊旅行の朝も又、上下駅で武島さんとの対話のひとときを持つ事が出来た。

「吉野へ行って来られたそうですね、大海人の足跡、西行の草庵、南朝の大覚寺統の話等、会員全部に是非共聞かして下さいよ」と、ねだってみた。「はあ又いつか」「話は変わりますが武島さん、飛鳥の益田岩船へ登られました？」「いえ未だ登ってません」「飛鳥の駅より岡寺からの方が登り易いですよ。橿原ニュータウンの辺から見るとね、お天気のいい日は丘陵の中腹にある岩船がぼんやり見えますよ。色々の説があるようですが私は、斉明天皇と聞人皇女の墳墓ではと目されてる牽牛子塚古墳と絶対かゝわりがあると思うんですよ。もしいつか行かれる事がありましたら、武島さんの御見解是非共お聞かせ下さいね」とお願いした。それから、この牽牛子塚古墳、菖蒲池古墳と、広島県内の尾市古墳、御年代古墳、大佐山白塚古墳等の関連や年代等、三人の古墳談議はだんだん白熱を帯び、これから佳境に入るかと思われた時、くだんの大型バスが三人の前に顔を現してくれた。

そして山陰旅行から帰られた武島さんはすぐ徳雲寺に、尼子勝久の幼児時代を探訪され、その足で飛鳥へ行かれた由のお便りを頂いた。その日付は十月三日だった。岩船のことはとても興味深く聴かれたから、きっと御自分の目で確められたのだろう。

山陰旅行から帰られた時、「立石市長や、熊谷さんとも一緒でした」と、楽しかった話をいっぱいいっぱい聞かして貰ったと、薫兄から電話があった。そしてその時「熊谷さんの随想ですよ」と会報を読ませて貰ったとも言っていた。私如き者を歴友の一人に加えて下さってたのかという嬉しさもさる事ながら、その反面〃もの言う足〃をお持ちの素晴しい人物を失った寂しさの方がそれよりも遥かに遥かに大きい。

十月十九日朝、例によっていきなり「山形へ行って来る」と言われた時、奥さんは「この度だけは思い止まって下さい」と始めて反対されたという。二、三日風邪気味で体調の悪さが見え見えだったそうだ。山形県には、行基開基の吉祥院、若松寺という有名な天台宗の古寺がある。行基が大好きだった武島さんは、ひょっとしたらこれらを探訪に……ではなかったかと勝手な想像をしている。

十月二十一日NK病院に入院、そして十一月十五日に彼岸に旅立たれるなんて、あまりにもあっけない。その前日、十四日の昼、従兄さんが見舞われた時、寝ていては失礼と思われてか、元気な人のようにサッとベッドの上に座られたとか。その夜あまり月が奇麗だったから、「ベッドを動かして貰いましょうか」と奥さんが言われると、「いいよ」と言って昼のように、サッとベッドの上に座って美しい月をしばらく眺められたという。その時、武島さんの胸にどんな思いが去来していただろう。十五日の訃報が今もって信じられないのは私だけではないと思う。

NK病院に入院された時点で、医者は奥さんにそっと〃末期〃を囁いたらしい。出張医師の通う地元の診療所へ、五年程前から腸の不調を訴えていられたという。ならばその時どうして完璧な医療機器を備えた総合病院に行かれなかったのだろうと返らぬグチの私語を胸の中で繰り返す私である。

九月以降の武島さんのがむしゃらとも思える独り探訪（山形も含め）

は、ひょっとしたら御自身の終焉をうっすらと察知されてたのではないかしらと、そんな憶測がよぎる。奥さんは今頃、楽しかった金婚の旅淡路島を、涙といっしょにかみしめていられる事だろう。人の世に吹く風の妙と、複雑と、無情を想い、同世代の女として私まで胸かきむしられる思いでいる。

〃正覚院耕雲種禅居士〃塩飽の例会を、一瞬思い出させた戒名である。武島さん、沢山沢山お話を有難う。

合掌、南無釈迦牟尼仏

手紙

佐藤　秀子

突然の武島さんの訃報をお聞きし、山陰の旅行での元気なお顔を想った。とても信じられなかった。

例会の下見に田口さんと錦士さん、武島さん、奥様、わたしの五人で西城町へ行った時、浄久寺の門前は桜や菜の花、山野草の花盛り、とりとめもない話をしながら山道を歩いたり写真を撮ったり……楽しかった。小川のせせらぎの聞こえる家で奥様手づくりの野草のお茶を頂きながら、ずらりと並んだ本棚でひっそりと生きている蔵書達を羨ましく眺めた。

数日後、写真を同封した手紙が送られてきた。簡結な文体にき帳面に書かれた字…今その手紙をとりだしてみているわたしには、手紙に残る武島さんの心が暖かく伝わってくる。手紙も葉書も書き手の心が、それを書いた時にはわたしにむかってくれていた筈で、その思いは文章のなかに残っている。中学時代から全部とってあるそれらはもうダンボール箱に三つ。

手紙にまつわる思い出はたくさんあるが、わたしが一番長い手紙を書いたのは十六枚でそれを読んで只一言「手紙、読みましたよ」と言ってくれた人は今はもう天国である。

入院した母が二十年前の手紙をなつかしそうに読んでいた。わたしも幼な馴染みや探訪の会の人達の手紙を持って入院したい。電話の声も嬉しいが、あとに残る手紙も又、嬉しい。叔父が丹精こめた菊の花の写真を同封してきた二十年ぶりの手紙は数ケ月後には形見となった。

先日でかけた文学館には川端康成や佐藤春夫、尾崎士郎らの手紙が展示してあった。肉太の万年筆で書かれた個性ある字体を作家の顔を思いうかべながらみていると、やはり心のこもった手紙には生命が生きながらえていると思わずにはいられなかった。何十年も前に手紙に移りすんだ心の一部は永遠に見る人の心にささやきかけるに違いない。わたしも箱の中に眠っている手紙を晩年になって読み返すのを楽しみに数が増えるのを祈っている。

「お寺や神社をまわって集めた印がもう二千を越しましたよ」笑顔の武島さんの声が耳に残っている。

「本当ですか。わたしもそれくらいまわってみたいな」古寺や由緒ある寺を一人でゆっくりと歩くのが夢であるが果して何個、集印できるだろうか。

朱印帳を携えて天国へ行った武島さん、わたし達が行ってO・B会を開けるまで待っていて下さいね。

さびしいですよ　武島さん　今は亡き人を偲んで

末森　清司

「親しき人との出逢いは悲しい別れがまっている、それは早いか遅いかの違いだけである……」、若い頃読んだある本にこんな文章があった。

武島さんとの出逢い、そして別れ

それは予想以上早いものでした…。まさかこんなに早いとは今でも信じられないのです。

武島さんと知りあったのは八年前、備陽史探訪の会が初めてバスでの史跡見学を組み、一般参加者を集めて神石郡の史跡めぐりを武島さんの案内兼講師で行った時です。私はこの時が会へ初参加。武島さんの説明について勉強しながら色々と問合せをしたのを今も鮮明におぼえております。以後武島さんには史跡や郷土史の事をおしえて戴き、又、会が気に入って入会し皆様方と一緒に郷土史の勉強をする様になりました。この頃はまだワンカップを片手にマイクをにぎってなんて事はして居ませんでしたヨ。段々と会の方に深入りするにしたがって……あとは皆様の御存知の通りです。そしていつのまにか例会の行事は備北地方の史跡めぐりは武島さん担当、年明けの一番バッターは私の担当と決った様な形でずっと続いておりましたが昨年の高野町史跡めぐりが武島さんの最後の担当例会になったとは……悲しくさびしい事です。

史跡めぐりをしていたある日武島さんは私に次の様な事を言われまし

た。

「郷土に伝わっている古からの伝説というものは大切にしなければいけない。伝承とか伝いつたえなんてものは歴史の資料にならぬといわれる史家は多いが郷土史をやる以上伝説を大事に思いこれから歴史や史跡を堀りおこしてみる事が必要だ。伝説の中には多くの事実が隠されている。それを見つけて世に出すのも郷土史家のつとめだと思う。」と色々な例をあげて話して下さったのが今も強く心に有ます。この言葉を大切にして今後もコツコツですが郷土史の勉強をやっていきたいと思ってます。又会の人達と共に楽しい史跡めぐりや見学会をと念じています。いつものクセでついつい酒に手が出て迷解説、脱線行きの私の姿をあの世からみて笑って居られるでしょう武島さん。

私はさびしいですよ。ごめいふくを祈ります。　合掌

〃落葉踏み友を偲んで寺まいり〃

正月二日作

武島種一氏（享年七〇）

平成元年十一月十五日没

人名（にんみょう）の島のララバイ

小島　袈裟春

◎正覚院

本堂、と思った正面の大きな堂は大師堂であった、真言宗系でも特別に祈祷中心のこの寺の性格がうかがわれる。本堂は一段上に小じんまりと古びて居た。御本尊の聖観音様は、横手の収蔵庫に収められた今も、規帳面に三十三年に一度の御開帳を守らされて居る。分厚い垂れ幕の向うで三十年余りを一人で過すのは淋しくないだろうか、それ共ウツラ、ウツラと眠って居るのであろうか、人事ながら気に掛る。

永徳二年と彫られた鰐口（わにくち）の前の説明書に、応永十二年と、二十三年も後の年号が書かれて居た。多分東光寺の鰐口の説明と入違えたのであろう。住職さんは「ア、今度直して置きます。」今日の日和の様に長閑（のどか）であった。さすが……と云えば大師堂の横に、茶舗があった。一服三百円也、濃茶の冷えた泡をなめて居たら妙に人恋しくなって、帰りかけたH子さんを引止め生れ故郷と云う、その島の話しをして居る内に何時しか魚釣りの話しに変り「釣れたんですよう」、彼女の声にすっかりその気になってしまった。

◎笠島地区

江戸時代の街並が残って居る……その言葉に引かれるのは現今の町が余程殺風景と云う事の反映であろうか……タイムスリップと云っても綺麗に修理された真木家に入って、修理費四千万円との説明に、変に感心した私しであった。そのまゝ住み付き度い気持を押えて土間に出て来ると、本島荘の運転手さんが「この家には、隠れ部屋があるのですよ。あの部屋の屏風の後に秘密の入口があるのですよ」、といわくありげに云った……隠れ部屋……何んと懐かしい事を……六十年近い昔、隣の同年の女の子と一緒に古い土蔵の二階で夕暮まで息を潜めて隠れて居た事を思い出してしまった……何事も起らなかったが……。

◎東光寺

この寺の宝物殿、と云うか薬師様の収蔵庫は良く出来て居た。場所も良い、前面に一寸した桟敷を設ければそのまゝ法要が営める。薬師如来様、この様な事を真先に考える私しですが、持病を持つ私しにどうか御利益を下さいます様に、金五円也の黄銅貨の音が、カタリと意外に大きく響いた。住職の懇切寸寧な説明が終るやいなや、堂内に入って、左手の薬壷と右手の施無畏の印相の、出来る限り多くの人を救う為と云う、その縵網相をさがしたのだが、それは益のない事であった。あのふくよかで美しい優しいお顔を拝すればそれで充分ではないか……。

◎人名（にんみょう）の墓と両墓制

正覚院に行くバスの中で運転手さんが「あれが皆さんも良く御存じの（人名）の墓です」と云うのを聞いて一瞬ドキリとした。（人名）なんて良く所か全く考えて居なかったから……何しろ私しは、福山からのバスの中で神谷会長が「皆さんは水軍と云うと村上水軍の事と思うでしょが、今日行く所の本島（ほんじま）も塩飽と云う水軍の根拠地ですよ」と云うのを聞いて、思わずウウウと云った位ですから。―さて人名の数は六百五十人と大急ぎで覚えて、さあ来れと身構えたのですが、この代表者である年寄達の墓の、立派な事、五輪塔からオベリスク型、位牌型と並ぶのは壮観である、石材の島だからと軽くケチを付けては見たものゝ威圧感は拭えない、特に専称寺前の吉田家の墓など何んの為に、と不思議な程巨大

で立派だった。

さて、それとは逆に近くの甲生地区に埋め墓の一帯が残って居た、転々と小さな自然石を置いただけの埋め墓が……。

……庶民は一日も留めず土中に埋めよ、盛土は許さぬ……埋める場所は不毛の地を選び、一所に定めよ……大化二年（六四五）の薄葬令をそのまゝに。そして別に参り墓を作る、両墓制の風習も……。先の年寄達の墓は殆んど（逆修墓）だと云う。親の生前に子供達が、或いは自分で自分の墓を作る、これではより立派にせざるを得ないではないか。巨大な逆修墓は孝心の、或いは権勢のパロメーターなのであった。だがその年寄達も死して後は、あの埋め墓の何処かに人知れず眠って居るのであろう……潮騒を子守唄にして。

◎塩飽勤番所

（人名）を一般の農民の様に思ってはいけない、彼らはレッキとした、元武将なのである、当然家来？等もあったであろう。

人名以外の一般島民を江戸時代には（毛人）と云ったと云う、統治される側の人々であろう、幕末の動乱時この人々が武器を持って勤番所を取巻き（人名）に加える様要求したが遂に敗北した、と云う、「歴史読本」昭和五十六年九月号の抜粋である。そこに勤番所が（自治）と云うより（統治）の場所であった事が察せられる。勤番所の宝物、いや依って立つ所の支柱は何んと云っても朱印状であろう、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と続く朱印状は人名の唯一の証明であった。何重もの箱、更に石櫃に収め、尚専用の土蔵に保管する、それでも安心出来なかったかも知れない。さて、展示棚の文書を目を皿の様にして探したが信長、秀吉、家康の署名がない、思わず「変だなあ」と声を出したら近くに居た人が「あれですよ」と指差して呉れた、何んと（朱印）であった、自分の名を書いて判を押す習慣しか頭になかった私しの知識範囲が恥かしかった……。偉い人達は印判を押すだけなのは分かり切った事なのに、迂闊な事であった。

◎木烏神社

日本武尊を導いたのは木製の烏だったのだろうか？　いや烏をシンボルとする集団だったかも知れない。

奈良県橿原市の四条古墳、同、天理市の小墓古墳で出土した木製ハニ輪の中に鳥形のものがかなりあったと云うから古代日本と鳥との関係は余程深いのであろう。それはさて置いて、石鳥居の笠木の先端は確かに珍らしい。江戸時代初期の建立と云うが、ワラビ手紋か雲形か、私しは雲形と見度いのだが（理由は御想像の通りです）。そして境内の千歳座、良くぞ保存、修理して下さいました。文句なしに頭が下がる。その上御披露目の興行も行なったと云う、日本中でも数少ない江戸期の芝居小屋、今後も有名役者を招いて芝居興行が継続出来れば、文化的にも島の為にも何んと素晴しい事でしょう。私しはと云えば廻り舞台の構造を熱心に覗いて来ただけなのですが。

◎お園の焦れ松

本島巡りのパンフをパラパラと見て居たら（お園の焦れ松）とあって悪代官を村人達が沖の隠れ州に誘い出す所で途切れて居た。それが気になって居たが、本島荘で買った本に続きが出て居て、お園と云うのはその悪代官の一人娘で、村人に欺かれ隠れ州に置去りされて、帰らぬ人となった父を案じ、一晩中待ち続け遂に海に身を投げた、悲しい娘の物語りであった。村中の嫌われ者も娘に取ってかけ替えのない唯一人の肉親だったのである。村人達がお園を祠に祀り、沖の州を（園の州）と名付けたのも故なき事ではない。その福田浦は探訪予定ではないのだが…。帰りのバスの中でH子さんが島に伝わる民謡？を唄って呉れた（歌詞が長いから民謡ではないかも知れない）船で沖に出た人を待つ思いの唄だそうだ。やゝ哀調をおびた調べが私には、お園の心情と重って島の歴史の子守唄の様に聞えた。海は必ずしも幸せ許り運んで来るとは限らない。本島荘で買った本の中に島に伝わる唄として八編程載せてあったが、H子さんの唄った歌詞は見えない様だ。昔、恩師に教えてもらったと云われたが、もしかするとH子さんはこの唄の最後の伝承者かも知れない。

一九八九年十一月八日

塩飽本島巡りの中から

後藤　匡史

十月十五日の例会、塩飽本島に行った時のことである。

会長の知人で、以前九月十五日の下見で一度お会いしたが、島で民芸の人形を造っている方の仕事場を見せてもらった。その時おヒナ様の内裏様とお姫様の座っている位置が、まちまちであった。本来は座った方か

ら見て左に内裏様、右にお姫様が正式の置き方である。
これは中国の思想からきているもので北位南面と云って北から南を見て左に東、右に西と神社でも必らず南に向いている。大相撲でも北が正面、南が向う正面と云う。又、官位でも左大臣、右大臣と云う様に左が上位にくる。
京都の御所に行くと左近の桜、右近の橘と、これは天皇が紫宸殿から南大門の方に向ってさす言葉で、よく京都に行った人が間違って南大門から見て左近の桜、右近の橘と云う人がいる。
又、京都に上るとか古語にあるが王城の地、京都は、中国の古い都、洛陽、時代劇などで上洛と云う言葉を使うが、中国、三国時代の魏の国、邪馬台国と交流があり、ここの都が洛陽であり卑弥呼の使者が上洛したと、この様な時に使った。
ちなみに春夏秋冬を動物で表わしたのが青竜、朱雀、白虎、玄武と云って方角は、東に川あれば青竜、西に道あれば白虎、南に池あれば朱雀、北に山あれば玄武とされ、これを四神と呼ぶ……これにあてはまる地形を四禽図に叶うとして王城の地選定の基準とされた。陰陽道より

吉備路古墳巡り
つづり方狂（教）室
（その二）

前号の山陰の旅つづり方狂室が大変好評であった。そこでその二を送る。
。バスの中から左に見えるのが吉備の真備の銅像です。どうぞ見て下さい。
。作山古墳の説明を聞きながら
これだけ大きな古墳でも調査出来ません。　ハイ墓々（馬鹿馬鹿）しいは、これから始まった。
。帰り吉備津神社に立ち寄った。そして神社境内にて銀杏の木の紅葉が見事だった。それをい銀杏しで見ていた。
。吉備津神社の長い廊下の回廊を歩いた。ええ…今来たのにもう回廊（帰ろう）
。ついでに上田秋成の小説、雨月物語に出てくる鳴り釜を見たが、その横にオクドがあった。……俺の荷物も、ここにオクド（置く）
。今日の講師の網本さんの講義を聞いて、私なんか網本（足元）にも及ばない。
。バスの中にて藤村さんにオカシの梅ボシをもらった。砂糖は甘くて、塩は辛い、そして梅ボシはスッパイ……ああ……スッパイ（失敗）は成功の元。
。昼の弁当を風土記の丘で喰べた。丁度一句を考えていた最中でミカンをもらった。これがホントのミカンせい（未完成）交響楽と云う。
。田沢さんにバスの中で缶珈琲をいただいた。そしてバスは観光バスだった！

一句　秋深し
王者が眠る
古墳かな

さらなる発展を願って

種本　実

本年は当会が発足以来十年目を迎える年であり、皆様と共に喜ぶものです。私も入会以来会の活動を通してさまざまな事を学び有意義でありました。
十年の節を機にさらに会を発展充実させる為に　ということは私達会員の課題でありまして、皆様も新年を迎え種々豊富をお持ちの事と存じますがここに私の考えの一端を述べさせていただきます。
第一に、会の目的を鮮明にし、共通の目的に向かって会員相互が力を出し合い、共に満足感の得られる活動をする。
第二に、例会及び部会の活動において新しい考えを持った方に積極的に行動してもらう。
例会担当者は初めての方に参加していただくように輪を広げることが会の発展に不可欠と思います。部会にしても、歴民研は私が代表ですが名に値する活動をするべくユニークなプランを求めている所です。
会員一人一人が〝何か〟を会に寄与する事　そして〝無理なく楽しく〟を基本に今年も力を合わせ頑張りましょう。

≪短信≫

✡二月下旬には　本年度の総会を行ないます。会に対する御意見、御要望をお寄せ下さい。
✡本年度最初の例会は、三月四日、末森さんの担当で河内町の竹林寺へ参ります。御期待下さい。

備陽史探訪の会事務局
〒720　福山市多治米町五ー一九ー八
田口義之方　TEL 0849(53)6157